

神戸市外国語大学 学術情報リポジトリ

The EBINA Danjo's first trip to Europe-North America

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 1995-10-31 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 關岡, 一成, Sekioka, Kazushige メールアドレス: 所属:
URL	https://kobe-cufs.repo.nii.ac.jp/records/2244

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



海老名弾正の第一回欧米旅行 について

關 岡 一 成

は じ め に

海老名弾正（1856-1937）は81年の生涯で四回の洋行を行っている⁽¹⁾。この時代の代表的キリスト者としては、平均的回数でありとりたてて多いということはない。しかし注目すべきことは、彼の場合は若い時代の留学経験がなく、第一回の洋行（1908年）が50歳を過ぎてからのものであることである。この第一回洋行の時期、彼は本郷教会牧師をしており、その教会には東京帝大、早稲田などの学生を中心に毎日曜の礼拝には数百名が出席し、東京において一、二を争う大教会の牧師であった。また、主催する月刊誌『新人』も発刊以来9年目に入り、読者も三千数百あり、彼の活動の絶頂期にあたる時期のものである。青年時代の留学と異なり、いわば思想・神学が確立した後の洋行ではあったものの「今回の洋行は非常に益する所があつた⁽²⁾」と述べているように、海老名にとっては意義深いものであった。

この第一回洋行については、詳細な彼自身の筆になる『世界漫遊日誌』が残されている。この日誌の7月21日の条には「此日は朝より日記の書きのこしをみたした。是れで折角余の為に一雄が求め置いて呉れた Note Book を用立つことが出来る。実は60日以上 of 事柄を三四日で書き終つた」と記しているので、ノートは長男一雄が用意したものであることや、毎日その日に書いたものでないこともこれでわかる。しかし、日誌を見る限り汽車の時刻や宿泊料金なども記されているところをみればメモのようなものは取ってお

いて、時間のある時にまとめて書いたものと思われる。

これに次ぐ重要な資料としては、『新人』9巻6号から10巻1号に掲載されている「海老名主筆通信」がある。また、アメリカ西海岸での活動については『新人』掲載の千葉豊治の「北米通信」や『千葉豊治遺稿』が詳しく伝えている。

また、海老名がこの洋行で行ったと思われる英語演説の手書きやタイプによる草稿が、同志社大学人文科学研究所・湯浅与三関係資料にある。ただ、残念なことに大部分がいつどこで為された演説の草稿であるかは判然としない。

さらに、海老名の今回の旅行の直接目的であったスコットランド・エジンバラでの第三回万国組合教会大会については、613頁にわたる膨大な大会記録が刊行されている。⁽³⁾ この書物にはこの会議での海老名の演説や発言が記されている。

なお、海老名研究の際によく使用される渡瀬常吉『海老名弾正先生』では322-330頁でこの旅行のことが取り扱われている。ただ、この書物では「此の行には詳細なる旅行日記あるも、本著には掲載する余地がない⁽⁴⁾」として、『世界漫遊日誌』が用いられていない。

海老名の第一回洋行は、221日の長期に及ぶものであり、その記録『世界漫遊日誌』も373頁にわたる膨大なものである。数々の興味深い記述もあるが、当論文では旅行の概要、欧米人・日系人へのメッセージ、第三回万国組合教会大会、外国の印象の四点を中心に考察することにしたい。

1 旅行の目的・訪問地・日程など

(1) 洋行が遅れた理由

先ず最初に、海老名と同時代にキリスト教を受容した著名なキリスト者が20代、遅くとも30代には留学したり洋行を経験しているのに、海老名の洋行

が50代になって初めて実現したことについて考察しておきたい。

彼が最初にアメリカ留学を考えたのは、熊本洋学校時代である。卒業後に留学したいと思ひ師のジェーンズ (L.L.Janes) に相談したところ「君達は今米国に往くな、肥後は多くの人が粟を食ふ、若い時米国に往つて肉食をする、一般人と共に粟を食ふことを嫌らうやうになる、さうなつては国事に従事する事が出来なくなるから、今少し眼が開いてから後往くが善い⁽⁵⁾」と諭され、米国留学を断念した。

その後もたびたび留学の話はあったが、1890(明治23)年と1893(明治26)年の二回は、かなり本人もその気になり実現寸前まで計画は進んだ。しかし、1890年の時には「日本伝道会社社長」に就任の要請があり中止となり、1893年の時には、エール大学への留学がスカラシップも保証されて決定していたが、当時海老名はアメリカン・ボード(American Board of Commissioners for Foreign Mission)や宣教師からの教会の独立を主張して、宣教師と対立していたこともあり、そのような時期にスカラシップを貰つての留学は誤解を招くということで、これまた中止となった。このエール大学への留学はほとんど実現しかけた計画であつた為に自分でも忘れられないものであつたのか、アメリカ訪問でエール大学の寄宿舎に泊まつた時に「余は十四年前此寄宿に寝る苦なりしが⁽⁶⁾」と感慨深げにその日誌に記している。

このように二度の留学のチャンスを逸したものの、彼自身は何が何でも留学・洋行したいという願ひを持っていた訳ではない。むしろ留学とか海外旅行にはそれほど関心がなかつた。彼の周囲には留学・洋行帰りの人間が多くいたが「洋行して帰つた者を見るに、何うも氣にくはんと、自分の眼が高くなつて來たので、洋行する氣はなくなつて了つた⁽⁷⁾」というのが率直な気持ちであつた。

そのように海老名自身はそれほど洋行にこだわりがなかつたものの、むしろ周囲がその実現を望んでいた。「海老名主筆の遠遊を送る」と題した『新人』誌には、「海老名主筆は必らずしも外遊を熱望せられざりしならん、然

りながら主筆の外遊は、種々の理由よりして、本郷教会員と、京阪神同志者と、吾等新人社同人とが年来の熱望たりし也、而かも主筆と其周囲の事情は、長く主筆をして日本を去らしむる能はず、遷延今日に及ばしめたり、機会は端なくも到来し、茲に主筆を欧米に送らんとするは、吾等同志の限りなく満足し歎喜し感謝する所なり、主筆も今回こそは快く万里の旅路に向はるゝならん⁽⁸⁾と記している。

海老名の洋行が遅れたのにはこのような事情があったが、たまたまエジンバラで開催の第三回万国組合教会大会に日本組合教会を代表して参加するやうにとの要請があり、それを機に欧米各地を訪問することになったのである。

(2) 旅行の日程と訪問地

大会そのものは1908年6月30日から7月9日の10日間であったが、この機会に欧米各地を視察したいということで、日程は5月中旬から9月中旬の4ヵ月間が計画された⁽⁹⁾。しかし、その後計画がふくらみ7ヵ月の旅程となった。

このスケジュールの中で往路・復路ともアメリカを経由することにしたのは、日系人の多い西海岸でいくつかの講演活動が計画されたことにある。この準備は全てアメリカ在住の海老名の弟子千葉豊治によって為された。アメリカ訪問には、この外にアメリカン・ボードの年会への出席、恩師ジェーンズ訪問、それに彼のキリスト教の源泉であるニュー・イングランドの「religious atmosphereを呼吸する為⁽¹⁰⁾」ということなどがあった。結局、アメリカでは船中を除く日程の半分に近い81日間が費やされた。

ヨーロッパの方は、大会が開催されたエジンバラで11日間、大会後にロンドンで44日間、ベルリンで20日間が主な滞在地とその期間である。尚、太平洋往復、アメリカーイギリス往復などに45日間を費やしている。

5月13日に信濃丸で横浜を出帆して12月19日にモンゴリヤ号で横浜に帰港するまでの、主な訪問地を『世界漫遊日誌』により辿ってみると以下のようになる。

横浜 → Victoria → Seattle → Portland → San Francisco (Oakland, Berkley, San Jose) → Sacramento → Ogden → Salt Lake City → Chicago → New York (New Heaven) → Liverpool → Edinburgh → London → Bruxelles → Amsterdam → Frankfurt → Leipzig → Berlin → Dresden → Wien → Venice → Florence → Rome → Milano → Zürich (Mt. Rigi) → Paris → London (Oxford) → New York → Boston → Hartford → Worcester → Pittsfield → Toronto → Ottawa → Montreal → Toronto → Chicago → Ogden → Los Angeles → Riverside → Fresno → San Francisco (Berkley, Oakland, San Jose) → Honolulu → 横浜

2. 欧米人・日系人へのメッセージ

(1) 欧米人へのメッセージ

旅行に出発する4日前の5月9日に上野の精養軒で開かれた送別会には、海老名の初めての洋行ということもあり、徳富猪一郎が発起人になり、島田三郎、安部磯雄、山路愛山、井上哲次郎、小崎弘道、松村介石、元良勇次郎、浮田和民、田村直臣、押川方義、平岩愼保など著名人40名が出席し、それぞれ歓送の言葉を述べたのに対して最後に海老名は「六ヶ月の洋行に於て果して何物を得るゝか知らず。彼地に於ては寧ろ日本の儒道、仏教に現はれた神観、人観、世界観等に就きて語らんと欲す⁽¹⁾」と述べていることから明らかに、当初から日本の伝統文化に養われたキリスト教受容者として欧米人にメッセージを語りたいという願いがあった。

この願いは、5月13日出発の朝に『新人』誌のために執筆した「外遊発途の辞」の中でも、次のように吐露されている。

余は各国到る処、日本が二千五百有余年修養し得たる徳性とその光栄とを荷ひ行くと同時に、又余及び余が同信の人々が最近数十年間に学び得

たる基督の心を明にせんと欲す。故に余は独り日本のクリスチャンたるのみならず、神道はいふも更なり儒教及仏教の精髓をも代表すべきを想ふに当り、余りに責任の重且大なるに戦慄を禁ずる能はず。欧米人は余に之を要むるにもあらざるべく、又日本の同胞も之を余に要むるにあらざるべし、しかも余は日本のクリスチャンとして此事を想はざるを得ず。余の鞆を開き見るもの余が儒者なりや、神道家なりや、仏者なるやを疑はん。然れども余は更に言はんと欲す、余は神儒仏の精髓を有する日本のクリスチャンたるなりと、読者諸君の意志に違ふことなくば幸甚。⁽¹²⁾

人種、国家を超越した世界的精神、普遍的思想としてのキリスト教を、日本の伝統的文化や宗教に養われた日本人として受容するということ、即ち「日本的キリスト教」の視点からのメッセージを伝えたいとの願いである。

彼の外国人へのメッセージは、言葉の関係や知人がアメリカに多くあったこともあり、エジンバラの大会での発言を除けば、ほとんどアメリカでの活動に限定されている。教会の集会などでの講演ではどのようにしてキリスト教に接し、受容するに至ったかという体験談を中心に行い、大学や学者などの集会では、少し組織的に彼の思想を述べている。

残念ながら、『世界漫遊日誌』にもどこでどういう内容の講演をしたかについての具体的な記載はない。ただ、西海岸での英語講演のいくつかは千葉などが直接聞いてその時の様子を記したものがある。例えば、最初のシアトルの教会での英語説教の内容については、千葉は次のように記している。

その題目は「日本に於ける宗教思想の発展」といふのであつたが、武士道で育てられた日本の武士の子供が基督教に転向する為に如何に煩悶し、如何に迫害を受け又如何にその難局を切抜ける為に戦ひ抜いたか、両親から短刀をつきつけられ、切腹を命ぜられた青年も自分等の同志の中にはあつたが、彼等はそれにも拘らず命懸けで新しき神に寄縋らんとする

態度を示し親達を感動させた。日本の武士の家庭の様子等アメリカ人にとっては非常に珍しい話なので、所々分らない所があつても、大体重要な点は非常に強く印象されるので、結局非常な感銘を与へた。⁽¹³⁾

また、日系人の邦字新聞『日米』の1908年6月10日の「社説」は、海老名の活動について次のように総括している。

海老名牧師に感謝すべきことは、米人間に真の日本を紹介せられたることとなり。同師が外人に向つてせられたる講演は、シヤトル及桑港附近に於て前後四五回ばかりである。其他は個人との会談にして、未だ師の主張の幾分をも述べ得たりと云ふに過ぎず。然れども海老名師の語れる日本は、従来米人間に理解せられたるが如き浅薄なるものに非ず。其の日本の精神的生長発展と、これに伴ふ精神的苦闘と、将来に於ける日本民族の精神的使命とを力説したる時に多くの米人は襟を正したり。蓋し之れ海老名師の如き精神的体験を有する人格者にして初めてなし得る処、シヤトルの一牧師が『先生は米人のために特に遣はされたる伝道者の如し』と曰はれたるが之れ決して米人の御世辞にあらず。實際之れが為めに沿岸日本人の基督教会も米人社会に其存在を認めらるゝに至りたるが如くにも思はれ、海老名師の労を多とすると共に、同師が帰途重ねて米国各地に於て日本の精神文化の為に説かるゝ所あらんことを希望して止まざる処なり。⁽¹⁴⁾

これらは、西海岸での活動の状況を報じたものであるが、海老名が外国人にどのような講演をしたかは、イギリスから再度アメリカに渡る際に千葉苑の手紙で「小生は学校又は独特なる集会に於て英語を以て演説を致して見度候に付、其の都合にて御周旋を願度」として演説可能な演題として以下のようなものを記している。

“The religious struggles of the Japanese youngmen”,
“A place of Christianity in moral education of Japan”,
“New need of American missionaries in Japan”,
“The development of religious thought in Japan”,
“How to see God”,
“Eternal life of Christ in us”,
“The vocation of the American and Japanese”⁽¹⁵⁾

これらの演題から、ある程度その内容がどのようなものであるか察しがつくが、残念なことにどこでこれらの演説がなされたか具体的な記録はない。ただ、最も彼の思想を組織的に述べたものは“The development of religious thought in Japan”であったと思われる。湯浅与三関係資料にタイプ草稿があり、『海老名弾正先生』332 - 358頁に翻訳と共に掲載されている“The development of the religious idea in Japan”は第二回日の洋行の際の講演のようであるが、内容的にはほぼこれと同じことが主張されたものと思われる。彼はこの講演で、キリスト教の唯一神思想が日本の伝統思想と全く隔絶したものでなく、唯一神への傾向は神道の天御中主神、儒教の天（天帝）、仏教の阿彌陀佛などによって準備されつつあったものとして捉えた上で、キリスト教の唯一人格神を最高の神観として受容の必要性を説いている。

（２）日系人へのメッセージ

アメリカ西海岸の日系人への講演活動が実現したのは、海老名からアメリカ在住の千葉豊治への働きかけがあり、千葉が準備したものであった。

海老名弾正先生から手紙が来て、先生がその年の六月、イギリスのスコットランドのエジンボローで開かれる組合教会の万国大会に日本を代表して出席することになったので、丁度いい機会だから太平洋岸に暫く滞在して、日米人間に講演をしてみようと思ふがどうかといふ相談であった。

之は私にとっては願つてもない事なので早速時の日本人の中央機関である日本人協議会の会長の安孫子さんや牛島君に諮つて、さうして太平洋沿岸の方々に先生に講演をお願いすることになった。⁽¹⁶⁾

海老名が千葉にこのような依頼をしたのには、千葉が熱心な本郷教会員であったことや、この旅行に千葉の婚約者のひろ子を同道したという密接な師弟関係にあったこともさることながら、すでに数年前より日系人の間に海老名の講演を聞きたいという要望があったことによるものである。

この旅行に先立つ3年前にライオン歯磨の創立者小林富次郎が世界旅行をした際に通訳・秘書のような役割で同道した加藤直士は（彼らは共に海老名の牧会する本郷教会の会員であった）、アメリカから「北米通信」を『新人』に寄せ「到る処に海老名先生の御渡来の日を質問せられ候間、近き将来と答へ候に皆々喜色満面の有様に御座候⁽¹⁷⁾」と記しているので、この機会に日系人への啓蒙活動を計画し千葉に相談したものと思われる。

当時、太平洋沿岸には約10万人の日系人がいて、⁽¹⁸⁾ 排日運動などもあり困難に直面していた。この日系人に対する海老名のメッセージがどのようなものであったのかについては、千葉と『日米』新聞の「社説」が記しているので、それらを紹介しておきたい。

先生の講演は上陸の即日からシヤトルに始まり、カリフォルニア各地に於て殆ど連日、或日は日に数回の講演を十四五日間も続けられたことであつたが、元氣旺盛なる先生は壯者を凌ぐ勢を以て、在留同胞に対しては日本民族の長所欠点を挙げ、その海外に於ける使命、特に精神的使命の重大なるものあることを説き、懇切に移植民者としての心得を諭され⁽¹⁹⁾（た）。

永住論は久しく吾人の主張し来りたる所なるも、日本人に一種土蜘蛛的慣習ありて、海外に移住しながらも心常に故山に恋々たるものあるは、

植民人として甚だ惜しむべきことなり。然るに海老名牧師は克く此の在留同胞の弱点を觀破して、極めて適切なる警告を与へられたり。例へば『諸君は一碗の飯を数人にて奪ひ合つゝある日本に歸つて尚ほ彼等の食を奪はんとするか』と戒め『骨と皮ばかりの日本は最早諸君を容るゝの余地を有せず、諸君は勇を振つて出稼根性を一掃し、此の天恵豊なる海の此方に新家庭を造り、以て日本民族発展の基礎を確立すると共に、四海同胞の襟度を養うて米人と親近せよ』と、これと同じ意味のことは在留同胞に対して従来とても幾度か説かれたる所、必ずしも耳新しと云ふには非ざれども、現に在留同胞社会至る處出稼根性より生ずる弊風続發して排日の種を蒔きつゝある此際、海老名師の如き權威ある人格者の力強き警告と奨励とが其の心構を一變せしむる上に、永住土著の決定をなさしむる上に甚大なる力ありたるを信じ、感謝せざるを得ざるなり。⁽²⁰⁾

この時の講演がいかに好評であつたかは、これが縁になって海老名にとっては第二回の洋行となる1915年7月10日-10月19日の三ヵ月余、在米日本人会から招聘されて再度アメリカを訪問、啓発講演をしていることからわかる。⁽²¹⁾

3. 第三回万国組合教会大会

(1) The International Congregational Council について

The International Congregational Council は、海老名や『新人』は「万国組合教会大会」と訳している。他の表記としては「万国会衆教会大会」として「組合」でなく「会衆」が用いられる。後述のように、厳密には「Congregational Church」と日本の「組合教会」は同一のものではないので、正しくは「会衆」を用いるべきであろうが、海老名が「組合」を用いているので、当論文では「組合」を用いることにする。

海老名が出席したのは、第三回であるが、最初の大会は1891年にロンドンで開催されている。このような大会が開催されるようになったきっかけは、アメリカで発行されていた“The Congregational Quarterly”で Hastings Rosa が1874年に“An Ecumenical Council of Congregational Churches”という論文を発表したことによるものとされている。⁽²²⁾

当初の計画では、メンバーは450人で、その内訳はイギリス・アイルランドから150人、アメリカから150人、その他の地域から150人で構成されることになっていた。⁽²³⁾大会参加者のリストを見ると厳密にこの数字にはなっていないが、ほぼこの原則で人選が為されていることも明らかである。また、開催地は第一回がロンドン、第二回がボストン、第三回がエジンバラとなっているので、イギリスとアメリカで交互に開催されることになっていたようである。

この大会の一つの大きな特徴は、何かを決議したり、問題の解決を目指すものでなく、主に世界の Congregational Churches のメンバーが一同に会して、交流・親睦することに主眼がおかれていた。それゆえ、それぞれの大会ごとに詳細な大会記録が刊行されているが、決議文のようなものは一切記されていない。

筆者が1993年度在外研究でハーヴァード大学滞在中に、神学部の図書館で見ることのできた1891年の第1回から1966年の第10回までの大会記録を見た限りでは、この大会は第1回から第4回あたりまでが最も充実しており、その後は規模の上でもかなり縮小されたものになっている。⁽²⁴⁾

第一回のロンドンでの大会には日本からは原田助が参加しているが、そのいきさつについて湯浅与三は、1891年(明治24)年4月1日-2日に第6回組合教会総会・第14回伝道会社年会が岡山教会で開催された際「同年7月ロンドンで開催されるべき万国会衆教会大会へ代員出席方勧誘の書面に対し如何にすべきか問題となった。その時我が日本組合基督教会は決して所謂会衆教会(Congregational Church)ではないと云う意見が有力であつた。併し結

局横井氏の動議により単に書面を発することとなつた。併し実際は海外留学中であつた原田助氏が之に出席した⁽²⁵⁾と記している。当の原田によると、エール大学での勉学を終えてグリフィス(W.E.Griffis)と共にヨーロッパに滞在中に横井時雄から手紙が来て、大会に出席するよう要請されたということである。⁽²⁶⁾

1899年ボストンで開催された第二回大会には、宮川経輝が参加している。⁽²⁷⁾

このような前二回の大会を受けて、海老名が第三回大会の日本代表として参加することになったものである。

開催地はスコットランド・エジンバラ、期間は6月30日(火)から7月9日(木)の10日間、参加者は17カ国から367人、その内訳はイギリス・アイルランド138人、アメリカ141人、その他88人であつた。日本人としては海老名一人であるが、アメリカン・ボードの日本派遣宣教師である Otis Cary 夫妻が第二回に引き続いて参加している。⁽²⁸⁾

(2) 大会での海老名の演説について

このような多人数の参加、しかも日本の組合教会は弱小であり、さらに今回主催のイギリスの Congregational Churches とは深い縁もなかったということもあってか、日本の代表者である海老名には演説の割り当てがなかった。

大会3日目の7月2日に、それまでの演説などを聴いていて感じるころなどもあり、アメリカの委員を通じて20分間の演説をしたい旨申し入れた。その時には即答は得られなかったが、彼自身は準備にかかる。⁽²⁹⁾

大会5日目の7月4日はピクニックにあてられていたが、その際に大会の書記より10分間なら演説は可能だが、との打診がある。しかし、彼はすでに45分ほど要する演説草稿を苦勞して22,3分にまとめたところであつたので、何とか20分にして貰えないかと交渉をする。しかし、10分間しか可能性はないと念を押される。はたして10分間で自分の考えていることが述べられるのかそれを考えるとピクニック中の「車中も船上も風景などを楽しむ心地にな

れぬ。果して十分にてなし得るや否が大問題である⁽³⁰⁾と葛藤するが、その日夕方には10分間ということで受諾することに決心した。

海老名はすでにアメリカで英語演説は経験済みであるが、世界各国を代表する人々の集まりで、もともと45分間ぐらい必要な内容の演説を20分ほどにまとめていたものをさらに半分の10分間に短縮されたので、はたして自分の考えていることがうまく伝えられるのかどうか心配であった。翌日の7月5日の日誌には「余は余の十分間演説が気に懸つてならぬ。十一時半に寝した」とある。そして、7月6日午後のセッションの後の報告事項で「最後明午前の変更を報告さる。他にあらず海老名の十分間論文を聞くといふ。満場同意、此一項が加へられた」ということで、正式に大会8日目・7月7日の午前の部で海老名の演説が行われることになる。この日の夜の集会は欠席して、部屋で翌日の演説の練習を行った。

このような経緯で海老名の演説が実現し、いよいよ当日の7月7日 Morning Session の三番目のスピーカーとして“The Progress of Christianity in Japan”と題して演説。その内容については後述することにして、この日の日誌には「思ひ切つて読んだが十分の Alarm bell が鳴る前に読み終った。(略)急速にやつたから如何と心配したが、心をこめた所には拍手あり、賛成の声もして先ず安心した。(略)午後は2時より野遊。幾人となく余の演説に同感を表した⁽³¹⁾」と記している。事実大会記録の中にも海老名の演説に賛成の意を表したものがある⁽³²⁾。

大会での正式の演説としてはこれのみであるが、大会での彼の発言としては、10日目の7月9日にボンベイから参加した Justin E. Abbott の“The Attitude of the Missionary to Native Beliefs and Customs”に対する Discussion で5分間の Remarks を行っている⁽³³⁾。

(3) 演説内容について

海老名が申し入れてやっと実現した演説において、彼は何を主張したので

あろうか。具体的にその内容に入る前に、注目しておかなければならないことは、この当時 Congregationalist の間で神学をめぐる保守派と進歩派が対立していたことである。この大会でもどちらかというといギリスの演説者は保守派から選ばれており、アメリカは進歩派の立場から演説をする人が多かった。主催者のイギリス側は当時ロンドンで一、二を争う説教者であった進歩派の City Temple の牧師キャンベル (R.J.Campbell) を代表者に選ばず、⁽³⁴⁾ メインスピーカーとして保守派のフォーサイス (P. D. Forsyth) を立てた。

海老名はこのフォーサイスの講演を聞いた時には思わず「是れはたまらぬ。何故ここに來たらうと思ふた」と嘆いたり、講演後には「余も一言と思つたなれど例の控え勝ちなる余は遂に黙した⁽³⁵⁾」と記している。また、アメリカに再び立ち寄りこの大会に代表として参加した人の中に同じような思いを持った人がいたことを記している。⁽³⁶⁾

海老名の10分間演説の内容をすべて紹介することはスペースの関係でできないので、要点のみを紹介したい。⁽³⁷⁾

日本人がキリスト教受容をするにあたり問題となるのは、神道・儒教・仏教など伝統的な宗教との対立ということではなく、より深刻な問題は一つにはカトリック渡来以来長年にわたり培われたキリスト教に対する偏見であり、他の問題はキリスト教の再渡来と同時に渡来した反キリスト教思想ともいうべきダーウィン、ハクスリ、ミル、スペンサーなどの思想との対立である。特に科学教育を受けた青年知識人は進化論に代表される科学思想とキリスト教思想の対立に悩まされている。聖書を文字どおり受け入れる保守的神学ではこの問題は解決できない。また、神を超越的存在とか第一原因とする神観や人間を罪人とする人間観は神学としては知的満足を与えるかもしれないが、実際に生きている人間の慰めにはならない。

キリスト教の中心思想は、神が人類の父であり全てを平等に愛してい

ることであり、われわれ人間がキリストと共通する清い聖なる魂、即ち良心をその内に持っているということである。保守的神学が説くように、キリストを知らずに死んだ人間は救われずに地獄にあるのではなく、キリスト教以外の宗教や哲学で説く真理を信じた人達も天国にいる。キリストはそれまでの真理探究を最も推し進めた人物であり、真理を明らかにした人物である。

もう一つの重要な事実は、Congregationalism と民族主義の結果についてである。アメリカン・ボードの宣教師は自給の原理を強調した。それは日本人に歓迎された。貧乏で経験に乏しい若いキリスト者たちは、宣教師の指導の下に自給教会の組織に努力した。そして最終的には宣教師からの独立も完全に果たした。アメリカン・ボードほど偉大な働きをしたミッションはない。我々はアメリカの Congregationalist の自治の精神、独立の精神、完全な良心の自由の原理に負うところが大きい。今や我々は守勢から攻勢に転じ、福音は日本・武士道の道徳を清め、人々をキリストの下に導いている。一昨年は1,500人、昨年は2,300人、今年は既に1,000人が受洗している。今やキリスト者は急激に増加しつつある。

キリスト教は多くの点で成功している。多くの日本人が、仏教徒であれ、儒教徒であれ、神社の氏子であれ、キリスト教が真理として説く山上の垂訓、神の父性、人間の魂の価値、愛、人類の兄弟であることなどを知っている。

近年著名な進歩的キリスト教学者たちによって述べられ、純真なキリスト者によって確認されたキリスト教の本質は、日本においても多くの人によって受容される事柄である。日本はキリスト教の中心・本質を熱望しているのであって、その残骸ではない。

4. 外国の印象

海老名が第一回洋行で訪れた国は10ヵ国に及ぶが、比較的長く滞在した国はアメリカ、イギリス、ドイツの3ヵ国で、後の7ヵ国は主要な諸都市でそれぞれ数日間を過ごしたに過ぎない。

一番長く滞在したアメリカでは、講演日程がつまり観光らしい観光もしないままであった。それゆえ、いよいよサンフランシスコを発って帰国の途につく際にも「米国は何れも通過したままで一向に見物はして居らぬ。帰国の上聞かれても何の答ふこともなければ、名残は更にして深いのである⁽³⁸⁾」と記したほどであった。

ただ、アメリカについては以前からアメリカン・ボードの宣教師を通じて、また日本のプロテスタント・キリスト教はアメリカの教会と深い関係があり、教会関係の留学生の大半はアメリカ留学をしていたこともあり、アメリカのことはかなり知っていたので、それまで聞いていたことの確認はできたといえる。ヨーロッパ諸国については、哲学・思想の上でドイツに親しみを持っていたものの、その他の国の実情に関しては、あまり通じていなかった。いよいよロンドンから大陸に向う時には「誠に之れからが旅行にて候、可愛い子には旅させよとあるが五十を越えて尚此試練を経べきかと実は苦々しき感が生じ申候、独逸は兎に角して通過せらるべし他郷に入らばさぞや困惑いたすならんと存じ候、旅行者は強面か、推しの強いかな又無鉄砲かでなくてはならぬ、小生如き小心翼翼では実にたまらぬ次第に候⁽³⁹⁾」と漏らしているほどである。少しは理解できるドイツ語圏はともかく、英語の通じないヨーロッパ諸国での単身旅行の不安を記したものである。

ところで、留学経験のない海老名の語学力はどのようなものであったのだろうか。

(1) 海老名と外国語

英語に関しては、熊本洋学校で4年間、同志社で3年間、英語中心の勉強をしているから、相当の英語力があつた。しかし、卒業後30年間英語で書かれた書物は常に読んでいたものの、英語で原稿を書き演説するという事は少なかったので、大変な努力と緊張を伴うものであつた。シアトル上陸の翌日に初めての英語説教を同地の教会で行った。この日の経験を『新人』に次のように書き送っている。

日曜四回は日本に於てすらやらず、殊に英語二回は大閉口であつた。午前英語説教後は胃腑に多量の膽汁を出したものと見え、口中が頗る苦くなつたのであつた。実に千五百人の白人に対しての説教、二十分間とはいへ、中々の大骨であつた。自分の発音とエロキウションとは先ず大丈夫、唯だ未だ原稿が離されぬ、これさへ離すことが出来れば幕の内、先づ先づご安心を乞ふ。⁽⁴⁰⁾

大学での講演とか会議の演説などでは、ペーパーを用意してそれを朗読したが、教会などの説教で主に体験談をする時には、徐々に原稿なしで話すようになり、10月11日のニューヨークでの説教は完全に原稿なしで話し「此日曜日は余に取つて実に関ヶ原であつた。原稿なしの英語演説を試みたから最早大胆となり、之れでやり通す決心が出来て荷物が取り去られたやうである⁽⁴¹⁾」と記すまでになっている。アメリカ人が聞くと「slow and broken」な英語ではあつたが、⁽⁴²⁾言わんとする意味内容は十分に伝わるものであつた。

ドイツ語に関しては、彼がドイツ神学・思想に傾倒することもあって、学生時代には学習しなかったドイツ語の勉強を長女が誕生した43歳から始めた。その後の数年間の独学で書物を読むのには不自由しなくなったが、会話となると周囲にドイツ語を話す人がいなかったということもありほとんどできなかった。

フランクフルト滞在中の日曜日に、礼拝に出て説教を聞いた際にも「如何

にしても分からぬ。余は固より聞いて分からないが、過る3ヵ月一枚をも独逸の書を読まず。英語で脳髓を支配した故に実に忘れてしまった。真に忘れた。此3日間心懸けて居れど浮かんでこない⁽⁴³⁾」と記している。

ただ、このフランクフルトで「室掛の少女と字引を取りながら独語をあやつて面白かつた⁽⁴⁴⁾」とか、ライブチッヒでポーターと「時々片言交りの独乙語を以て爺さんと語る。少々其云ふ事が分る⁽⁴⁵⁾」とも記しているので、ドイツ語圏での旅行については英語圏ほどではないが、不安はなかった。その他の諸国では観光都市においても今日のように英語が通じず苦勞をしている。言葉の通じない諸国の訪問を終えて、再び英語圏に戻って来たときにはほっとした様子が日誌にも記されている⁽⁴⁶⁾。

(2) カトリックについて

ヨーロッパ諸国を巡る際の海老名の視点の一つは、カトリック国・カトリック教会の実情を見ることにあった。しかし、プロテスタントは進歩的であるのに対してカトリックは保守的であるという彼の従来の考えもあってか、カトリック国やカトリック教会に対しては批判的である。

仏国に入れば景色も一変し、人も一変する。景色は平凡となり、人は僻めるが如し。税官吏が取調べる様子が極めてケチである。猜疑心多い。余は何処にても荷物を開いたことはない。ここにても開かれなかつた。唯一吏員が杖を以て腰掛の下をさがしたのが氣にくわぬ。旅人に笑はれて居つたが、尤もな次第である。仏人はコセコセして居る⁽⁴⁷⁾。

(Gondolaに) 途中より Belgian の男女一行が同室に來た。其騒ぎといつたら、英米人に見るべからず。先ず日本人の伊勢參宮である。此人民は到底世界を支配すべからず。世界を支配するは意志の人たらざるべからず⁽⁴⁸⁾。

彼は、どの国の場合も必ず教会堂を訪れ、熱心に見学した。プロテスタントには通じていても、ラテン語、イタリア語、フランス語は理解できず、そのカトリック教会観はどうしても外観的な印象にならざるを得なかった。プロテスタントの場合も音楽などを中心とした礼拝には批判的であった海老名には、儀式中心の礼拝や、祭壇に仏像を置けばそのまま仏教寺院になるような礼拝堂、ローソク、聖水などは受容できないものであった。

(アムステルダムで)

Palace 前の広場より一方をさして鉄道 Station 近く行いた。大会堂あり、直に入る。天主堂であつた。少々参詣人もあり、献金があつたから小生も少々した。僧侶の無意味なる儀式が馬鹿々々しくなり、馬鹿な事に意味をつけたものである。こんなことを人間はせねばならぬかと思ひな⁽⁴⁹⁾さけなくなった。

(ベニスで)

一寸前夜の San Marco 会堂を見んとて行く、昨晩は San Marco まで四つの会堂内を見たが、大同小異迷信の巣窟に外ならぬ。取も直さず寺院である。此の如き基督なら日本に入る必要はない。頻りに聖水を頭にかけて居る。⁽⁵⁰⁾灌頂である。兎に角、美術と儀式とで人心を驚嘆せしめて居る。

各地のカトリック教会を訪れてこのような印象を持った海老名は、ローマの総本山はさぞ儀式・美術・迷信・陰気などに満たされた所と想像して来てみると、彼の予想に反するものであった。

(St. Peter に) 入りて見れば想像とは丸で相違である。独逸, Austria, Venice, Florence にて見たる寺院とは全く光景が違うのである。

建築から装飾の Plan が決して陰気でない。余は Berlin の Kaiserkirche にて、先づ此位にてよからうといった。此寺院は Kaiserkirche と大同小異である。陰気なる Catholic 主義にあらずして Protestant 的である。(略) 余は思つた。殆ど此儘にて我等の会堂になすを得と。実に妙である。余は殆ど解するを得ぬ。余はそこに 4 時間も居つたろう、時間の経つに驚いた位である。⁽⁶¹⁾

余は今日まで天主教会を迷信と暴利の巢窟と思ひ来り、St. Peter を以て其本山とし最後の断案を下さんとして来りしが妙だ。全く予想外敵は本能寺にありだ。本能寺は Vatican の宮殿か将何処妙だ。⁽⁵²⁾

彼はカトリックの教会堂を見た後に「陰気」とか「マツ香臭い」という言葉でその印象を記しているのであるが、これは文字どおり会堂の中が暗くて陰気で、ローソクの匂いが立ち込めていることを意味し、ほとんど日本の大きな寺院の本堂と変わらない光景を考えてのものである。

筆者も海老名の『世界漫遊日誌』に従ってその足跡をたどり、海老名が見た教会堂を見学したが、フランスのノートルダム、フィレンツェの大聖堂、ベニスのサン・マルコ寺院、ミラノの大聖堂、いずれも夏の明るい季節に訪れたものの、昼間でも会堂内はライトの照明がないと見物できないほどに暗かった。そして、海老名が St. Peter と共にローマにある Laterano にある大聖堂を「是れも案外に陽気である」⁽⁵³⁾としているが、実際ここに入ってみると St. Peter 同様堂内が明るいのである。海老名はこれら二つを例外として、ローマにあるその他の会堂は「皆古寺で其陰気さかげん話にならぬ」⁽⁵⁴⁾とこきおろしているが、筆者の見たところでも暗いものであった。

このように、物理的な意味で暗い会堂を陰気とし、明るいところを陽気と記しているが、本質的にはカトリックの儀式中心・僧侶制・迷信的な要素が教会堂に現れているとして、それらを排斥すべきであるとしている。⁽⁵⁵⁾

ただ、プロテスタントの教会堂のように、マリア像も、豪華な祭壇も、常

時ローソクの香もなければよいかというと、そうとも言えないと考える。これはアムステルダムでの事であるが「新教の新会堂を探して入ったが、頗る大なる Cathedral である。マツ香臭い所のない代に、毫もありがたみがない。如何にしたらよい。大問題と思ふ⁽⁹⁶⁾」とも記している。

(3) その他の出来事

ア 欧米の人工美と日本の自然美

『世界漫遊日誌』に記されている事柄で、興味深いものを幾つか挙げてみたい。その一つは、人工的なものは欧米が優り自然は日本が優る、という記述がよく出てくることである。今日では日本の自然がどんどん破壊され、むしろ逆の印象を抱くので考えさせられるところである。

Christ Church は古風の建築にして或る部分は一千年以上にもなりそうである。全く古寺の感を抱かしむ。途中は電車の二階に居ったが天然の風景は日本のそれに及ばぬ。然れども万事人工が実にエライ。Park や何や彼や実に感心の外ない。⁽⁹⁷⁾

道路の設備には驚くの外ない。換言すれば天然は日本が優て居るが人工は遥に英国が優つて居る。日本人顔色なしである。⁽⁹⁸⁾

Bournemouth は、よく逗子に似て居る。然し風景としては逗子以南を優れりとするのである。が人工の行き届いて居るは感心の外ない。⁽⁹⁹⁾

イ 1 カ月半ぶりの笑

彼は何度か「小生の如き小心翼翼では旅行はダメにて候⁽⁹⁰⁾」と述べており、ヨーロッパに来てからは気の許せる友人・知人もおらず、言葉の問題もあり、単身での旅行で楽しみも少なかった。フランクフルトでプロテスタント教会の日曜礼拝に出席し、牧師が英語を理解したこともあり懇意になり、日曜学校で牧師の通訳で日本の事を話したりした後、夕食に招待され食事を共にし

た。その食事の席で「小生は余りに興に乗じて、2本の箸で食ふ仕方をやつて大笑したら、奥さんが少々驚いたやうであつたが、泣くのと、叫ぶのと、笑ふのは何処も同じだと夫婦語つたといふ。余はいふ。余の笑は特別である。余は実に1ヵ月半笑はなかつた。大笑を覚え⁽⁶¹⁾ずやつたのである」と記している。

ウ 生まれて初めてのビール

このように笑うことすらしない緊張の多い一人旅ではあったが、好奇心は旺盛であった。初期のプロテスタント・キリスト者はアメリカのピューリタン倫理を説く宣教師の指導の下、酒・タバコは一切嗜まなかつた。海老名も熊本洋学校以来アルコール類は飲まなかつたが、フランクフルトでは初めてビールを飲んでいる。

右も左も Beer ばかり飲んで居るから我も一ツやつて見やうと思ひ、目録を見れば、一番易い、一番 light のものを持つてこいといへば、通常のコップ四倍かと思はるゝ長い大コップに盛り来つた。飲めと思ひ大抵皆飲んだのは生れてより始めてであつた。少々酔ふ気があるか知らぬと思へ、戸外に出て散歩したが何事もない。日本酒であつたら大変だ。又 whisky でもあつたら倒れるかも知らぬ。独逸に禁酒会のないのも亦宣ならずやである。⁽⁶²⁾

エ 顎髭を短く切る

また、外観的な変化としては、青年時代よりこの洋行の時まで胸の辺りまで長くのばしていた顎髭を短く切ってしまったことである。いっどこで短く切ったのかは日誌にも記されていない。エジンバラでの大会でアメリカ人の演説に共感するところが多かつたのであるが、7月3日の条には「兎に角米人はエライ、元気旺盛である。余は髭を剃りたくなつた。余りにじじくさい」

と記しているのです、この頃に髭を短くする決心をしたものと思われる。そして、8月11日にロンドンからヨーロッパ大陸に向けて旅立つ時の写真では既に髭は短くなっているのです、ロンドン滞在中に短くしたものと思われる。

オ 日本の膨張主義肯定

その他にも、『世界漫遊日誌』にはそれぞれの国の道徳・倫理を知る一つの基準として、売春婦の有無などについて記したり、女性の外観の記述があったり、スイスでの登山（リギ山）など興味深い記事もあるが、最後に注目したいのは彼が国家の膨張主義を肯定していたことを伺わせる記述があることである。これは、彼が朝鮮統合や植民地支配に反対していないこととも関連があり重要なことである。

蘭国最早大国となる見込みなし。只、工業、商業、出来得べくんば、文学等に発達する外はない。市街は実に奇麗、隅から隅まで奇麗である。之に比すれば日本の市街は市街とはいへぬ。野外に外ならぬのである。然し日本は当分出来得べき丈膨張を努めざるべからず。町がきたなかるうが、何であろうが、先づ大々の区画に注意せざるべからず。充実は二百年の後にてよろしいのである。⁽⁶³⁾

先づ国家の輪郭を大にすること第一に必要と思ふ。学校も、宗教も、音楽も、農業も、美術も、文学も、この二三百年は日本を雄大にすることを心懸ねばならぬと思ふ一事である。⁽⁶⁴⁾

結 び

海老名の第一回洋行は、51歳から52歳にかけてのものであり、この年齢からも分かるように、思想的にもほとんど完成した時期の洋行で、青年時代の留学のように、それがその後の歩みに決定的な役割をはたすようなものでな

かった。海老名論の中には、この洋行の前には、日本主義の立場であったのが、洋行の後には世界主義に変わったかのように述べたものもあるが、そのような事実はないと言える。

海老名のこの洋行にあたっての願いは、神道・儒教・仏教・武士道などの伝統思想や価値観で養われた日本人として「人種と国家とを超越したる、世界的、宇宙的精神⁽⁶⁵⁾」であるキリスト教を受容した者、すなわち日本人キリスト者として欧米を視察し旅行することにあった。そして、この日本人キリスト者の自覚は、洋行前も後もいささかも変更がなかった。海老名が12月19日に横浜港に帰着し、翌20日の本郷教会で672人の聴衆を前に帰国後第一回の説教で強調したのも、日本人としての自覚と普遍思想としてのキリスト教をあわせ持つ必要のあることであった。

こゝに於て予は諸君に要求する、諸君に先づ第一に日本人たるの自覚を有せんことを要求する。此自覚にして国民全体に行き亘るならば、其国は最早君子国、世界に誇るに足るのである。此自覚をして如何なる下層の労働者までも、日本人民全体に持たせたいといふのは私の希望です、熱勢です。(略) 次ぎには一面基督心を持たれんことである。此の心を持つて居れば、世界あらゆる国、あらゆる人種の胸奥の秘中の秘に入ることが出来る。此心は紛争を熄むる和魂である、此精神は世界の不浄を清むる新たなる力の水である。此心あつて世は平かに人は安らかに、人各々其本分を尽して、安んじて其生を楽しむことが出来る。自分は此精神を以て此度の旅行をつゞけて、何等希望に反したものを感得しない。到る処ホーム、遇ふ人知友、歓迎、厚遇、平和、安全であつた。自分は此点に於て深く神に感謝するところなきを得ないのである。⁽⁶⁶⁾

注

(1) 第1回、1908年5月13日—1908年12月19日 アメリカ・ヨーロッパ

第2回, 1915年7月10日—1915年10月19日 アメリカ

第3回, 1919年2月4日—1920年1月25日 アメリカ・ヨーロッパ

第4回, 1923年12月12日—1924年7月5日 アメリカ

- (2) 『海老名弾正談話』『太陽』15巻9号, 202頁。
- (3) Volume of Proceedings of the Third International Congregational Council, Congregational Union of England and Wales, 1908.
- (4) 渡瀬常吉『海老名弾正先生』322頁。
- (5) 『太陽』前掲書, 201頁。
- (6) 『世界漫遊日誌』6月22日の条。
- (7) 『太陽』前掲書, 201頁。
- (8) 『新人』9巻5号, 61頁。
1904年にも洋行計画があったことが『新人』5巻3号, 47頁に「熊本通信」として「海老名先生の御洋行は, 本年御見合せの由灰かに承り申候, 就ては是非本年中に一回は御来熊の程切望の至りに不堪候」と記されていることからわかる。
- (9) 『新人』9巻2号, 71頁。
- (10) 『世界漫遊日誌』10月24日の条。
- (11) 『新人』9巻6号, 69頁。
- (12) 「外遊発展の辞」『新人』9巻6号, 3頁。
- (13) 千葉豊治『千葉豊治遺稿』363, 364頁。
- (14) 渡瀬常吉, 前掲書, 325頁。
- (15) 同 書, 326, 327頁。
- (16) 千葉豊治, 前掲書, 362頁。
- (17) 霊星子(加藤直士のペンネーム)「北米通信」『新人』6巻6号, 57頁。
- (18) 『新人』7巻9号, 61頁参照。
- (19) 渡瀬常吉, 前掲書, 323頁。
- (20) 邦字新聞『日米』1908年6月10日「社説」, 渡瀬常吉, 前掲書, 324頁。
- (21) 千葉豊治, 前掲書, 366, 367頁参照。
- (22) 第1回万国組合教会大会記録“The International Congregational Council”に掲載の Alex Mackennal の言葉, Preface の24頁。
- (23) Albert Peel: These Hundred Years, p. 320.
- (24) 世界大会記録の頁数が, 第1回418頁, 第2回566頁, 第3回613頁, 第4回514頁であるのに対して, 第5回がそれまでの半分にもみえない204頁になり, その後も減り続け, 第10回では102頁となっていることから, この大会の推移が分かる。
The International Congregational Council の開催年・開催地・大会記録など
第1回 July 13-22, London 1891
The International Congregational Council, James Clarks & Co., 1891, 418p.
第2回 September 20-29, Boston 1899
Volume of Proceedings of the Second International Congregational Council, Press of Samuel, Usher 1900, 566p.
第4回 June 29-July 6, Boston 1920

Volume of Proceedings of the Fourth International Congregational Council, The National Council of the Congregational Churches of the United States, 1921, 514p.

第5回 July 1-8, Bournemouth 1930

Proceedings of the Fifth International Congregational Council, Congregational Union of England and Wales, 1930, 204p.

第6回 June 17-24, Wellesley 1949

Proceedings of the Sixth International Congregational Council, The Pilgrim Press, The Independent Press, 1949, 204p.

第7回 June 20-29, St. Andrews 1953

Proceedings of the Seventh International Congregational Council, The Pilgrim Press, The Independent Press, 1953, 179p.

第8回 July 2-10, Hartford 1958

Proceedings of the Eighth Assembly of the International Congregational Council, Independent Press, 1958, 173p.

第9回 July 4-12, Rotterdam 1962

Proceedings of the Ninth Assembly of the International Congregational Council, Independent Press, 1962, 176p.

第10回 July 7-11, Swansea (South Wales) 1966

Proceedings of the International Congregational Council, Independent Press, 1966, 102p.

- (27) 湯浅与三『基督にある自由を求めて』325, 326頁。

- (26) 原田健編『原田助遺集』の1891年6月14日の日記に「東京番町教会ヨリノ招聘状ニ接シ又日本組合教会ヨリ余ヲ万国組合教会総会ニ日本代表者トシテ派遣ノ義申来ル」(85, 86頁)とある。

また、大会に関しては「7月14日-21日」の日記として「去十一日倫敦着、此日ヨリ万国組合教会総会ニ出席ス、委員等ノ歡迎至ラザルナク唯々感謝スルノミ、十六日夜グラッドストーン卿ノ演説アリ大喝采ヲ博ス、十七日ノ会議ニ於テ余モ求メニ依リ数言ヲ述ブ、十八日ニハ園遊会アリ六百七十名出席ス(90頁)」と記している。大会で原田は日本組合教会の歴史と現状報告をした。それは短いものであったが、日本について聞く機会の少なかったイギリスの Congregationalist には感銘を与え、第一回大会記録で Introduction を執筆した B.W.Dale は、この大会で個人的に最も感銘を受けた事柄として10カ条を記しているがその二番目に原田の発言を取り上げている。

- (27) 宮川は、Otis Cary の通訳で日本の教会が直面する問題について語っているが、短いもので大会記録の88, 89頁に掲載されている。
- (28) 第三回大会記録の List of delegates present at the council より。
- (29) 『世界漫遊日誌』7月2日の条。
- (30) 同上, 7月4日の条。
- (31) 同上, 7月7日の条。
- (32) Amory H.Bradford. 大会記録, 532頁参照。
- (33) 「論議の時に当り余も五分の論議をなしておいた」『世界漫遊日誌』7月9日の条。大会記

録, 541, 542頁に内容は掲載されている。

- (34) 海老名は7月19日にCity Templeで礼拝後にキャンベルに面会した際に、大会で出会えず残念だったと述べたのに対してキャンベルが「余が行いたらmobが起こるんだと答へた」と日誌に記している。“The City Temple 1640-1940”によるとキャンベルは1902年から13年間City Templeの牧師をしていて、その後New Theologyの問題で牧師を辞任し、後にはThe Church of Englandに移っている。海老名が面談した1908年ごろは絶頂期で彼の教会には朝・夕の礼拝に数千人が押しかけていた。
- (35) 『世界漫遊日誌』7月1日の条。
- (36) 同上, 10月20日の条。
- (37) “The progress of Christianity in Japan は大会記録, 358-360頁に掲載。
- (38) 『世界漫遊日誌』12月1日の条。
- (39) 「海老名主筆通信」『新人』9巻10号, 36頁。
- (40) 「海老名主筆通信」『新人』9巻7号, 56頁。
- (41) 『世界漫遊日誌』10月11日の条。
- (42) 「Dr.Adams は、余が昨日の説教を評して Mr.Ebina の説教は力があつたが、聴衆を感動せしめ、某 businessman をして未だ嘗て此の如く明確な Christian Experience を語りたるものなしといはしめた。新島氏の精神日本に生きて居ることは明であるといふた。彼は余の出席し居るを知らずして語つたので、余には興味が多かつた。殊に slow and broken といふたる所最も価値ある語である。是れ恐らくは一般の評ならん。余も大に同感であつた」(『世界漫遊日誌』11月23日の条)。
- (43) 『世界漫遊日誌』8月16日の条。
- (44) 同上, 8月15日の条。
- (45) 「海老名主筆通信」『新人』9巻10号, 38頁。
- (46) 『世界漫遊日誌』9月22日の条参照。
- (47) 同上, 9月21日の条。
- (48) 同上, 9月12日の条。
- (49) 同上, 8月13日の条。
- (50) 同上, 9月12日の条。
- (51) 同上, 9月14日の条。
- (52) 同上。
- (53) 同上, 9月16日の条。
- (54) 同上, 9月14日の条。
- (55) 同上, 8月14日の条, 参照。
- (56) 同上, 8月14日の条。
- (57) 同上, 7月31日の条。
- (58) 同上。
- (59) 同上, 8月1日の条。
- (60) 渡瀬常吉, 前掲書, 327頁, これは千葉豊治宛の手紙に書いているもの。
- (61) 『世界漫遊日誌』8月16日の条。
- (62) 同上, 8月15日の条。8月17日にもう一度ビールを飲んでいるが、その後は飲んでい

ない。ワインは2回飲んでる。海老名は帰国後は酒類を飲んでいないが、彼は酒・タバコを飲むことがキリスト教信仰の本質とかかわることと考えたり、いわゆる禁酒主義者ではなかった。小林富次郎の禁酒運動を教会として特に支援しなかったのもそのような理由による。

この点については海老名弾正「小林富次郎氏の信仰生活」『新人』12巻2号、86頁参照。

(63) 同上，8月15日の条。

(64) 同上，8月14日の条。

(65) 海老名弾正「日米の親和」『新人』9巻6号，4頁。

(66) 海老名弾正「余の二大感謝」『新人』10巻1号，15頁。